

---

# 卓球少女

希鈴レッド

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

卓球少女

### 【Zコード】

N3209W

### 【作者名】

希鈴レッド

### 【あらすじ】

高校二年生になる清水悠斗は、突然女子中学二年生の野宮美雪に部活存続のためにコーチを頼まれる。そして悠斗は、女子卓球部に訪れると、美雪をあわせた六人の卓球部がいた。これから悠斗はこの六人の少女たちとともに夏季大会を目指して日々を過ごしていく、恋愛スポーツストーリー。

## 第1話「始まりの軌跡」

春休み、俺 清水悠斗は、数日で高校一年生になる。勉強とかも大変になつていくことだろう。将来も決まっていないというのに……このまま学年が上がつてもいいのだろうか……。

赤点は取らないが、テストはだいたい平均以下だし、実技もだいたいダメなんだよな……。けど、一つだけ才能と言えば才能というものもある。

それは、子供の頃からやつている卓球だ。上手い方だとは思う。中学校の時は部長になり、みんなを全国まで行かせたことがある。日本一にはなつてないけど。

けど、体育はダメなんだよね、俺つて。

話を戻すけど、春休み。俺はこの選択で良かったのか今は悩んでいる。普通の高校生活だと思っていたが、まさかこうなるとは予想もしていなかつた。

春休みに入つて、市民総合体育館で俺はただ適当に相手探して卓球をやろうとしていたら、中学生くらいの女の子が複数の男子に囲まれていじめられているではないか。

「なんでそんな根暗で地味なやつやつてるんだよお

「そうだぜ！ 俺たちとバスケやるうぜ！」

「い、いいもん！ 卓球をバカにする人たちとなんか、スポーツしないもん！」

同意だ。俺もしたくない。だから俺は止めに入り、男子たちを追い払つた。

「大丈夫か？」

と俺は女子中学生に言つた。

「は、はい。ありがとうございます」

「そうだ。今日は相手がないから、卓球一緒にやらないか？」

「は、はい！私も困っていたんです！」

「どうな。周りは誰もいないし、男子たちにいじめられたしな。

「よし、やるう！」

それで、その女子中学生と卓球をする。

「！」

やつて、途中に女子中学生の手が止まる。

「あなたは……」

「……？」

意味が分からなかつた。どつかで会つたことあつたつけ？

「あの……経験者ですよね？」

ああ、それに気付いたつてわけか。びっくりしたよ。

「そうだけど？」

「あの、お願いです！私の学校の卓球部を助けてくれますか？」

「え？」

急なお願いだつた。だから、ついオーケーしてしまつた。

少女の名前は、野宮美雪<sup>のみやみゆき</sup>。大学や高校も付属である、姫原女子中学校出身だ。そう、女子校だ。

男の俺が女子中学生の卓球部を存続させるよつ、「コーチを頼んでいるのだ。どうやら、顧問の先生はいなくなつたらしく、部員は今は彼女一人らしい。もう廃部になりそうだが、次の新一年生が入部してきて、夏期大会で一勝でもすれば大丈夫になるらしい。だから、一年生が入り次第コーチをしてもらいたいということだ。

さて、これから一体どうなつていくのだろうか。

## 第2話「女子卓球部の「一チ」に」

五月になる。この中学校はこの月から部活に一年生を入れるようだ。だから一年生が入つてから、俺はこの女子校に呼び出された。校門に行くととても冷たい視線を女子生徒たちから受ける。はつきり言うと帰りたい！でも、困っているなら助けてあげないといけない。

「あ、清水さん！」

体操着に着替えている野富さんが来てくれた。助かった。僕は清水さんに案内される。

姫原女子校はとても大きく、きれいだった。小学生も中学生も高校生も制服だ。大学生も制服を着ている。着るところもあるんだな……。

「先に入部したばかりたちの子が待つてます」

「そ、そっか。何人入ったんだ？」

「五人入りました」

へえ。それなら部員も六人になつて、夏季大会の団体戦に出場できるな。

「こちらです」

当たり前だが、案内された場所は体育館だった。俺は扉を開ける。すると、

「きやああつ！」

「なつ！」

いきなりの悲鳴に俺も声をあげそうになつた。なぜこんなにびっくりされたのだろうか。……と思つてゐる場合じゃない。

「え、えつと……」

なんて言えばいいだろうか……。

「コーチの人？」

黄色い髪の少女が言つ。あれ？同じ顔が一人も……双子が入部

してきたのだろうか。いや、そうなのだろうか。

もう三人も特徴があるのだろうか。

眼鏡をかけてもじもじしている薄い緑の髪の子。俺をみて睨んだ感じの顔をしている。いかにもシンシンしている黒髪のロングヘアの少女。まっすぐな気持ちが見て分かる赤い髪のショートカットの少女。

「この人はこれからコーチとして教えていただく、清水悠斗さんです！」

茶色の髪の美雪が一onisoneして紹介する。

「ど、どうも……」

つい照れくさくなつてしまつ。女の子しかいないからだろうか。

「よろしくおねがいします！」

赤い髪の少女が元気よく挨拶してくれる。

「うん。よ、よろしく」

さあ、これから一体どうなつていいくのだろうか。

5

えつと、赤い髪の少女の名前が、石黒栞。ツンツンしてる少女は、森川葵。眼鏡つ子な少女は、田島夏奈子。双子の少女は見わけがつかない……。黄色の髪を右か左に結んでいるから、それでみんな判断しているようだ。右に結んでいるのが姉で、佐藤真美と友美。

全員、卓球初心者だそうだ。石黒さんのやる気は初心者だったからなようだ。

一から教えるって言つてもどこから教えればいいか分からないんだが……。

まあ、なんとかなるだろうとは……思つ。

とりあえず、田田は自己紹介で終えた。この調子で存続とかやつていけるのか？ 今回は考えてない俺のせいでもあるけど。

### 第3話「練習開始？」

さあ、俺は今から姫原女子校へ行かなければならない。家からなら割と近いが、高校から行くと結構遠い。急いで行かなければならない。バス停へ急ぐ。

「どこ行くの？」

「え？」

振り向くとそこには中学校からの友達の、咲花梨香さくはなりかと、小学校からの親友の桜庭圭一郎さくらばけいいちろうがいた。一人と僕は同じ卓球のクラブに入つて練習したりする。けど、こんなときには何の用事が……。

「まさか、彼女探しか？寂しいもんなお前」

別に寂しくなんかないし。圭一郎がからかつてくる。

「これから急ぎの用事があるんだ！じゃあな！」

俺はそう言い残してバスに乗つた。

「こりあ！ 悠斗つたら！」

なんか梨香が怒っているが気にしない。とりあえず向かわないとな。

なんとか部活の時間に間にあつた。

「あ、悠斗さん！」

声をかけられた。赤い髪を揺らしながら、栞が近寄ってきた。

「これから向かうのか？」

「はい！ 今日もよろしくお願ひします！」

そう言つて体育館の方まで走り去つた。元気だな。昨日はなんにも教えていないのに、いい子だな。

みんなもう準備が整つているようだ。ラケットまで持つてる。

「さあ、早くう！」

友美が相当元気だ。そんなに教えてもらいたいのだろうか。何から教えた方がいいだろうか。

「と、とりあえず前傾姿勢をしてみようか」

「ぜんけーしせー？」

真美と友美がそろえていった。

「じゃあやつてみせるよ」

俺は足の幅を大きく開いてみせる。

「え、ええつ！？」

俺から距離をとっている夏奈子が顔を真っ赤にして叫ぶ。嫌なのだろうか。

「肩幅ぐらいに開くのが理想かな。それで、かかとに重心をかけず、

つま先の方に体重を」

「女の子に体重とか言う男はサイテーね。消えればいいのに」「なんか傷ついた。毒舌すぎるよ、葵……。消えればいいとか相当効くよ……。

「葵ちゃん！ そんなことこいつちやだめだよ

「せ、先輩がそういうなら……」

美雪が助けてくれる。感謝します。

とりあえずみんなやつてくれているが、これからは仲良くしてくれるかが心配になってきたんだが。それにしても、葵がさつきから黙りっぱなしだ。体が震えている。汗の量も他の子よりも……。前傾姿勢はきつかったのだろうか。

「ふふふ……」

「ど、どうした？」

「？」

俺とみんなは急に笑い出した葵を見る。

「目がマジだ！！

「ふふふふふ！ 早く卓球やりましょ！ 卓球！」

ラケットを大きく振る。暴走し始めたようだ。今までの元気いつ

ぱいのかわいい少女の姿がまるでない。もはや戦闘狂な感じだ。  
— 言で表すと、怖い。

「うひして、いろいろなことがあって、練習が終わった。」

次の日。美雪と真美と友美以外誰も来なかつた。怖がられてしまつたのだろうか……。

## 第4話「森川葵」

「うあえず、部活は中止にした。みんなが揃わなければ部活にならない。みんなで強くならないと！」

「悠斗さん、どこ行くんですか？」

後ろから美雪が追いかけてくる。

「みんなを集めないと。こんなばいばいだと試合も練習もできないよ。俺はコーチとしてみんなを集めないと！」

「わっ……ですか？」

うつむく美雪に俺は肩に手を置く。

「気にするなって。みんなと仲良くなれるよ！」俺は頑張るから。じやあな！」

俺は美雪に踵を返してみんなを探す。ナビ、ギアを切り替えて見つけようか……。校内に入るわけにはいかないし……。

一応校門に来た。帰つていのいだらうか。外に出て辺りを見回す。

「……いた！」

長い黒の髪、今日はツインテールをしている森川葵だ。なんか苦手だが、部活に参加してと頼むしかない。

「葵！」

俺はすぐに傍に行つた。

黒かばんを両手に持ちながらひきひきを向く。

「何か用？」

どうしてこんな冷たく言い放つんだろ？ そんなに俺が嫌なのだからつか。

「今日は部活だろ？ 来ないのか？」

「いいじゃない、別に。あたしの勝手でしょ？」

そう言つて葵はまた足を進める。

「ま、待てよ！」

「つこてこないで！」

ものすゞく嫌われるんだな、俺つて……。

「まだ来るの！？」

人ごみの多い商店街で葵が俺につつかつてきた。

「部活に来いつて言いに来ただけだから」

「それにしては長いストーキングね」

「言われたくなかった。俺も何となくそう思っていた。悪いことだつてことは。

「め、迷惑だつたなら『めん』でも、部活を存続させたいんだ！」

君たちの卓球部を！」

俺の言葉に葵は目をみはる。

「それだけ？」

「それだけってなんだよ！　俺は女子卓球部を　みんなを守りた  
いから来てやつたんだ。他に理由は無い」

「つい叫んで言つてしまつた。周りの人が視線を向ける。しまつた  
な……。」

「も、もう！　迷惑よ！」

葵は顔を真っ赤にして走り出した。十字路でキヨロキヨロ見まわ  
して適當な店に入つていいくようだ。入つた店が……ゲーセン！？  
「つて、あのゲーセンはまずい。一人の女の子を入れるわけには…  
」

俺も葵が入つたゲーセンに入る。

「どこにいるんだ？　ここは不良な奴らがこの時間にはけつこうい  
るんだよな。ユーフォーキヤツチャーのところにもいない。ガチャ  
ガチャのところにもいない。ん？　あの階段付近に……。

「いた！　やっぱり葵だ！　男三人に囲まれていてる。葵は涙目にな  
つて怖がつてる。助けてあげないと。」

「葵ーー！」

男たちの間に入り、葵の手を握る。

「ふ、ふえつー？」

葵は驚いている様子だ。だが今は気にしない。

「なんだよ、お前！」

不良男子が俺に話しかけてきた。

「お、俺はこいつの彼氏ですよ、はいー、まあ行くぞ、葵ーー！」

「ちょつ……！」

葵の手を引いて、俺はゲーセンを出て、商店街を抜ける。

俺と葵は小さな公園に入つてベンチで休むことにした。空を見上げてみると、もう一番星が出ていて、少し暗くなっていた。

「な……なんで……助けにきたのよ」

息を切らしながら葵は尋ねてきた。

「ほつとけないからにきまつてるだろ。ああやつて涙目になつて臆病になつてる女の子を助けないなんて、俺はしないぞ」

そういうたら葵は、

「ば、ばっかじやないのー、涙目になつてなんかなかつたし！　あと、助けてなんて頼んでないから！　まあ、あんたはお人よしそうだから来るかなとはちょっと思つたりは、したけど……」

顔を真っ赤にしながらそう言つた。涙目になつたところを見られて恥ずかしかつたんだろう。俺はつい笑つてしまつた。

「何がおかしいのよ！」

ツインテールを揺らして葵がこっちを見る。まだ顔が赤い。

「俺、葵に苦手意識してたけど、なんかもうそんなの無くなつたよ。まだ会つて間もないのに。意外にかわいいな」

「な、ななな……」

葵は手を上下にぶんぶん振る。

「？」

「な、何言つてんのーー。そりやつて言つて、部活に来てもりもつ  
なんて思つてるのねー！」

別にそういうわけじゃないけど。まあいいか。

「来たくないのなら来なくたっていいさ。でも、俺にとつてはお前  
が必要だから」

「……え？」

まあ、分かつてくれないだらうけど。また新しいメンバーを探す  
しかないよな。美雪には悪いことしたなあ。

「じゃあな、葵」

俺は立ち上がり、公園を後にしてしまう。

「……待ちなさいよ！」

いきなり葵に袖をつかまれた。

「な、なんだよ？」

下を向いている葵。なんかもじもじしている。なんか印象が違う。  
「別に明日から行つてあげてもいいけど……」

「ほんとか！」

「勘違ひしないでね！ 私は美雪先輩に迷惑をかけたくないだけな  
んだからー。あんたがあたしを必要としてるとか、どうでもいいか  
ら。……帰る！ ……また明日」

足早で歩く葵。俺のことはどうでもいいのか。まあ美雪に迷惑を  
かけたくないと思つてくれてるなら嬉しこよ。

「また明日、か……」

俺も帰ることにした。これから自分の家は遠いけど。

## 第5話「佐藤真美と友美」

次の日、葵は来てくれた。

「良かつたあ。来てくれて！」

美雪も喜んでくれている。だけど、葵と夏奈子が来ていらない。一日連続で休むとは少し予想はしていたが、現実になるとは。

「たつきゅー やろうよお

真美と友美がそろえて俺に言つてくる。

「わかつたよ。とりあえず素振りをやろう！」

「はーい！」

二人は元気よく返事をする。やる気があつていいな。

とりあえず最初はフォアで素振りをさせる。表で三角形を描くようには振れと教えた。斜め上・下・腰辺りに動かす。……うーん。美雪と友美は結構上手いな。美雪は分かるけど、友美は結構才能があるかもな。基本ができるからな。問題は残り一人だ。真美は適当に振つてるようにならぬ。ちゃんとやれつて言つても、初心者だから仕方ないか。次は葵だ。前傾姿勢をしていない。ラケットを真横に振る。ものすごく悪い見本だ。

「おい、葵。フォアはこうやって振つてくれ。腰辺りから、顔のところへんまでいっててくれ。斜め上に上げるんだ」

俺は手本を見せる。葵はまじまじみてる。

「わかったか？」

尋ねると、葵はなぜか我に返つたかのような顔をする。顔を赤くしてそっぽを向く。

「な、なによ！ わかつてるわよ。ただちゃんと指導をしてくれるかどうか見てただけよ」

「おーおー……」

大丈夫なのだろうか、葵は。

「ゴーチイ！ こんな感じ？」

真美が呼ぶ。

「あ、ああ。さつきより良くなってるぞ！ 上手いじゃないか！」  
葵よりすゞいな。呑み込みが早い。真美も友美のようすじくな  
るだろ？

「……」

「ん？ 友美はさつきまで良かつたフォームが少し悪くなつたな。  
友美。もうちょっと前傾姿勢に」

「……」

なんか、不機嫌になつてる気が……。なぜだらう。

「きゅ、休憩にしようか……」

まだちよつとしかやつてないけど、つい休憩にしてしまつた。美  
雪もなんか不思議そうに俺を見る。気にしないでくれ……。

俺が記録をとつている時。

「真美のバカ！ もう、いつもいつも！」

突然友美が叫び、扉に向かつて走つていく。

「お、おい友美！」

俺は呼びとめようとしたが、もう外に出てついている。結構足が速  
いんだな。

「一体どうしたんだ？」

俺は真美に尋ねる。

「よく分かんない。ゴーチに褒められたつて言つたらなんか機嫌が  
悪くなつて出て行つちゃつた」

「そつか……。三人は素振りをしていてくれー！」

「悠斗さんはどうするんですか？」

美雪が尋ねてきた。

「俺は友美を探してくる」

俺は踵を返して、友美を探すことにした。

すぐに見つけた。木の陰でしゃがみこんで泣いていた。

「友美……」

「うつ……うつ……」

返事は無かった。聞こえなかつたのだろうか。俺は隣に座つて友美の頭を撫でてあげた。友美はピクシとなつて、こつちに顔を向けた。目が赤い。

「うつ……」

「何か嫌なことでもあつたのか?」

「……」

答えてくれない。何か悔しかつたのだろうか。そう言えれば真美が。

コーチに褒められたつて言つたらなんか機嫌が悪くなつて出て行つちゃつた。

なるほどな。

「真美に褒めていたのを気にしてたんだな」「泣いてこつちを向きながら友美は頷いた。

「真美は……ひつく・いづ・も……友美の上にいくがら……」

「……」

そうか。双子で容姿もそつくりなのに、どうしていつも姉ばかり褒められ、上の方にいくのか気にしてたんだな。

「俺が悪かった。お前は初心者とは思えないくらい最初から上手かつたから褒めたりするのを忘れてた。まだまだコーチとしては半人前だけど、これからは友美に対しても、経験者の美雪にも褒めていくようにするよ」

「友美が……うまい?」

友美は驚いているようだ。

「ああ。なかなかだつた。でも俺が真美の方を先に褒めたせいでバランスが悪くなつてた」

「そ・そうだつたんだ……真美より上だつたんだ……」

「圧倒してる感じの顔をしている。そりや今まで真美の方が上と思つてたからな。驚いて当然だろう。

「友美は卓球の能力が他より秀でてたんだよ。俺は今日、友美を見て思つたんだ」

「友美が……うつ……」

「あれ！？ 僕なんか悪い」と言つたかな……。泣かしてしまった。

「ご・ごめん」

「うつん……。嬉しくて泣いてるだけだから。ありがとう、『コーチ』田をこすりながら友美は言つた。よかつた、納得してくれて。『これからもずっと友美を見るから。もっと強くなるよ』応援してるぞ！」

そう言つて俺は撫でてやつた。すると突然、友美が俺に抱きついてきた。

「コーチは高校一年生だよね？」

「あ・ああ

「な・なんか恥ずかしいな。

「四つしか離れてないから、友美はコーチのこと先輩つて呼んでいい？」

「先輩でもいいさ。どう呼んでくれてもいいから」

「ありがと、先輩！」

友美は顔をあげて「コニコニ」としている。とても嬉しそうだ。

まだコーチになつてから三日田なのに、ここまで仲良くなれたのは進歩だな。このままみんなと絆を深めて、万全な状態で大会に挑んでゆきたい。

「さあ、練習の続きをやろうぜー！」

「はーい！」

「元気よく手を上げる友美。なんかいつも通りだなって思つてしま  
う。

「今日の練習はここまでだ」

「はい、ありがとうございました」

四人からそういうお礼を言われる。顧問の人もお礼を言われると  
こんな気持ちだったのかな。なんだかくすぐったい気分だ。

「せんぱーい！一緒に帰りましょーよお！」

「え？ うわっ！」

友美が俺の右腕に抱きついてきた。いきなりすぎて俺は動搖して  
しまった。わけがわからない。

「先輩は友美の婿なんです！」

そんな話聞いてないんですけど……っていつ言つてじじゃな  
くてだな……。

「友美の婿なら真美の婿だよ……」

次は真美が俺の左腕に抱きつく。

「ちょっと二人とも！ 悠斗から離れなさい……」

そうだ、葵。俺から一人を離して……葵は俺の後ろに回り込  
み抱き付いて俺を引っ張る。それでも助けようとしてくれてるのか？

「ゆ、悠斗さんは、渡せません！」

美雪は止めるどころかなぜか張り合いだした。前方から俺の服を  
つかみ引っ張る。前後左右から引っ張られてすじく痛いんですけ  
ど……。

どうしてこうなったんだ……。

## 第6話「田嶋夏奈子（前編）」

土日が過ぎて、一週間に入った。約一週間になつたな。コーチになつて。だけどまだ女子卓球部がまとまつていらないな。……と思つていたら。

「一日も来なくてすみません」

「あ、あの……すみませんでした」

「あ、いや。気にしなくて大丈夫さ」

来てくれた。栄と夏奈子が。

「栄ちゃんたちやつと来たあー！」

真美と友美も喜んでいる。

「これでみんなもそろつたし、練習を始めよー！」

「おー！」

「おー！」

真美と友美が手をグーにしてあげる。

「おー！ ガンバろ！」

美雪も元気だ。やつと揃つたつて感じだもんな。

「……おー！」

栄はなんか元気そうじやない気が……。

「お、おー」

夏奈子は相変わらずもじもじ系だな。かわいらしくていいくだ。

今日は卓球台を一台出して、球出し練習をすることにした。とりあえず、ピンポン球をラケットに当てる。とりあえず慣れさせるんだ。

まず、「チームに分かれ。夏奈子と栄と真美のチームと、栄と

友美のチームにしてみる。

「じゃあ三人の方は俺が付く。美雪は栄と友美の方に行つてくれ」

「はい！」

よし、俺と美雪は球出しをして、一年のみんなはミスでもいいからラケットでそれを返す。とりあえず最初はそんな感じだな。

「いくぞ！」

「は、はい……さやつ！」

うーん……。夏奈子はちょっと怖がりすぎだな。尻もちついちゃつたよ。

「ううう……」

「だいじょーぶ？」 夏奈子

「うん」

真美が夏奈子の手を持つてやつている。この調子でどんどん仲良くなってくれればな。

「栄ちゃん！」

え？ 栄？

美雪の声がした方を向くと、栄が座り込んでいる。かなり汗をかいている。まだ全くと言つてもいいほど練習をしていないというのに。

「悠斗さん！ 私、栄ちゃんを保健室へ運びます！」

「あ、ああ」

というわけで、栄と美雪は抜けることになった。それにしても、栄は気分が悪かつたのに無理して来てくれていたのか。なんか悪いな……。

休憩。みんなは水筒にある飲み物をいっぱい飲む。

「ふいー！ 生き返るなあ！」

友美がそんな一言を漏らす。真美も飲み物を飲んでいる。栄はツインテールを揺らしながらタオルで汗を拭いている。こっちを見てきた。

「何あしたたちを観察してるのよ」

「別にそういうわけじゃないから！」

俺は観察とかしたりしねえから。ただ体調が悪くないか見ていただけ……それは観察とも言えてしまうか。

夏奈子は一人でしゃがみ込んでいる。話しかけてみるか。

「おーい、夏奈子」

「ふえっ！　い、いやあ！」

え？　なんか悲鳴を叫んでいますが。驚いちやつたんですけど。何にもしてないんですけど。冷たい視線を感じる。この感じ、多分葵だろう。真美友美は睨んでいないと信じておこう……。

美雪は帰ってきた。栄は休ませてあげるらしい。まあ、体調が悪いなら仕方ないな。

とりあえず、今日の部活は終了だ。

校門まで来ると、

「せんぱーい！」

後ろから友美が来た。

「あれ？　真美は？」

「あとで来ますよお！」

「そうか」

やっぱり双子だから一緒に帰るんだな。そうだ、夏奈子について何か知っているのだろうか？

「そういや、夏奈子について何か知ってるか？」

「えー。友美以外の女の子の情報を教えるんですかあ？」

「ど、どういうことだよ……」

なんかいじられているんだろうな。友美はすぐに悪戯っぽい笑みをした。

「なんでもないですよ！　夏奈子はクラスが同じになつて、卓球部

になつたからお友達になれたとは思いますよー。でも先輩には仲良  
くできないかも」

「なんでだよ?」「

俺は怪訝そうに聞いてみた。

「夏奈子は、男嫌いなんですよ。だからこの学校に来たんだって!」

「お、男嫌いだって!?」

こ、これは大変なことになってきたかもな……。

## 第7話「田島夏奈子（後編）」

俺は家に戻った。どうすれば男嫌いが治るか考えた。……何か方法は無いだろうか。でも、無理に治そうとしてもダメだよな。迷惑だろしそう。

美雪に聞いてみた方がいいだろうか？ 同じ女の子だし。

と考えていたらいつの間にか金曜日になってしまった。栄は来ていない。まだ元気が戻っていないのだろう。夏奈子にも怖がられっぱなしだ。

「で、何か方法はないかな？」

美雪に聞いてみる。

「うーん……」

美雪は腕を組んで考え込む。頼む、何かいい案は無いのか？

「……明日は土曜日ですし、みんなで遊びに行くってのはどうでしょう？ そうすればいいんじゃないですか？」

と言つてニコッとき笑う。

「あ、遊びに行く、か……」

という流れで土曜日。女子卓球部 + 俺で遊園地に来てしまった。俺は保護者役になるのだろうか。この場合は、余計なことは考えないでおこう。

「遊園地だよ遊園地！ あれから乗ろうよー！」

「ち、ちょっと！ あたしはただ付いてきただけなんだからー。楽しみうとか思つてないんだからー！」

友美が葵を引っ張つてアトラクションへ向かつ。

栄は元気そうで友美についていく。

「早くいきましょー！ 悠斗さん！」

美雪が俺の手を引つ張つてきた。まさか一本道は美雪が楽しみたかったからこんな案を……なわけねえか。

友美と葵・菜が「一ヒーカップ」に乗る。俺と夏奈子と真美と美雪も違うカップに乗る。

「わー！ やるよ！ いくよ！」

「やめなさい友美……きやあ！」

「は、速いよー！」

動き出した瞬間、友美たちが乗つているカップが高速回転を始めた。友美のやつ、かなり楽しんでるな……。

「次あれに乗りたーー！」

「乗ろうよ、乗ろう！」

友美と真美がみんなを連れていく。

俺と葵と夏奈子は休むことにした。ベンチに座る。もちろん、葵は真ん中で、両サイドに俺と夏奈子がいる。……それにしても、

「なあ、葵」

「なによ？」

「ちょっとだけ、近いんだが……」

「……！ ベ、別に近くにいたいからってわけじゃないからー、あなたがかなりの……め、面積をとつてるからじゃないの！？」なぜか怒られた。葵が顔を赤くしてる。そんなくらいにまで怒るのか……。じゃあ、ちょっと離れた方がいいのかな。

「えっと……。じゃあ葵と夏奈子の分のジュース買つてるから、ちよつと待つててー！」

「えー？ ちょっと……」

「どうした？」「

「……なんでもない」

葵はよくわかんないなあ。まあいいか。まあ俺が離れたら葵も気が楽になつてくれると思つからいいか。

戻つてみたら、葵がいなくなつていた。夏奈子しかいない。葵は他の人とアトラクションに乗りに行つたのだろうか。じゃあこのジースは俺が飲むか。

「はい・これ」

「あ、ありがとう」やこまか

夏奈子はジースをおそれおそれ受け取つた。やつぱり怖いのだろ。ベンチに腰を下ろして、俺は夏奈子に言いたいことを伝えることにした。

「あ、あのや……」

「は、ひやいー！」

いきなりでびっくりして歎んじやつてる。

「俺のこと、怖いよな。俺みたいな男の人には慣れてないんだよな？」「すみません」

「いやいや。謝る」とじやないから

誰にだつて怖いことはあるさ。俺にだつて色々あるから……。

「俺、これからも努力するよ。夏奈子が怖がらないようになら……。迷惑だったら、あまり近づかずに指導とかするけどさ」

「迷惑なんか……じやないです」

え？ 夏奈子……。

「まだあまり練習したりしてないんですけど、清水さんは優しいってもう分かっています。教え方も上手いし、すごいと思つています。だから慣れようとしています。でも体が怖がっちゃつて……」

「そつか……」

夏奈子も自分では努力をしていたんだ……。俺がいるのを分かつて部活にも来ていたもんな。一週間、夏奈子は頑張っていたんだ。

「……ひやつ」

俺が夏奈子の肩に手を置いたらびっくりしたようだ。そりゃ当り前か。

「進歩してないじゃないか。す」「こな、夏奈子は。」この前までは近づいただけで怖がっていたのに……。君はすごい子だよ。君はもっと成長できると思う。これからも俺とみんなと卓球を練習していくつー！」

「……はい！」

初めて夏奈子が本気の笑顔を見せてくれた気がする。仲良くなれたのだろうか。

「の後はみんなと合流して色々なアトラクションを楽しんだ。これで、女子卓球部みんなとの絆が深められたと思つ。これで、大会に向けていっぱい練習できる！」

みんなで、女子卓球部を存続させていこう。

## 第8話「石黒栄（悲劇）」

今日は最初に体育館の半面を5周からのスタートだ。みんな元気よく走っている。卓球だつて、他のスポーツと同じくらい体力はいるからな。ちゃんと体力つけるための運動をさせないと。

「あ……あ……」

一番辛そうのが、夏奈子か。

「頑張れ夏奈子！あと一周だ！」

五人走り終わり、その後に夏奈子が走り終わる。

「頑張ったね！かなちゃん！」

「うーうん！」

栄の言葉で夏奈子は嬉しそうにしている。やつぱりいいな、友情つてやつは。

「それじゃーみんな！五分だけ休憩だ！」

「五分だけかあ。でも休憩だあ！」

「やつほーい！」

双子揃つて元気そうだ。

いや、みんな元気だ。美雪も、栄も、夏奈子も、葵も。なんか、やつと卓球部らしくなってきた感じがする。最初はばらばらだったけど、やつと揃うことことができた！俺は猛烈に嬉しい。このまま団結力が深まっていけばいいと思う。そして、夏季大会で一勝以上の成果を収めることができれば、この女子卓球部も存続できる！あと一ヶ月。勝つために頑張っていかないとな。

次はラリーの練習だ。それぞれラケットを持つて二チームに分かれた。前と同じメンバーでやることにしたけれど……まあいいか。

「…………ごめん、なさい」

え？ 栄？ 栄が荷物を持って外に出ていつてしまつた。卓球台

のそばにはラケットが落ちている。

「どうしたんだ、いつたい……」

俺が美雪に尋ねるとただ首を横に振るだけだった。

「わかりません……なんか突然あんな感じになつて……」「そうか……」

栄。どうして放棄したんだ。

「……俺、栄を追いかけてく！　今日の部活は美雪に任せていいか？」

「任せてください！」

「よし！　さんきゅー！」

俺は荷物を持って栄を追いかけることにした。カバンを持っていたから、体操服の姿でそのまま帰るつもりだらう。俺は一気に校門を目指して走る。

どこ行つたんだ……バス停。あ！　いた！　今バスに乗り込むつもりか！　俺は栄と話さなきゃいけないのに、ここで逃がしたら負けだ！

乗れたあ。

「な、なんで清水さんが……ここに？」

「栄を、追いかけてきた」

「どうして……ですか？」

栄は俺に怪訝そうに聞いてきた。そんなの決まつてこる。  
「君がないとダメだからだよ！」

「え、ええっ！？」

なんでそんなに驚いたんだ？　いや、そんなことはいい。

「だから、どうして部活を途中で抜けたのか教えてほしい。俺はコチだ。栄のこと、ちゃんと知つておかないといけない」

「わ……私の……こと……？」

栄はうろたえている。でも聞かないといけないんだ。なぜなのか

を……。

「少し長くなるかもですかけど、いいですか？」

「ああ……」

長くなる、か。今までのことも過去の出来事のせいなのだろうか。  
とても知りたい。

バスの一番後ろの席に一人で座り、栄の話に耳を傾けることにした。

「私は小学校くらいから卓球をやり始めてたんです」

「へえ、そうなのか？」

栄はうなずいた。そして続ける。

「卓球が大好きで大好きでたまりませんでした。毎日毎日、ペンホルダーのラケットを握って練習していました。でも私は他の人とは違う気がしてきたんです」

「他の人とは、違う？」

俺は首をかしげる。栄の寂しげな表情を見て、俺はこれから話すこととは辛いことなんだなと思った。

「あまり卓球経験のない友達と私は卓球をしてました。でも、友達と卓球をやる回数が減ってきたんです」

話すのが辛そうな顔してて、無理に話そうとして……。俺が我が儘を言ったのがいけないんだろうけど。

「友達は私を嫌うようになりました。私の卓球が強すぎる。女の子じゃないみたい。私ばかりにピン球を当てる。痛いからやめて。そんな声をいっぱい浴びせられて……。いじめまでに発展しました。学校に持つて行っていたラケットも壊されたりと、散々でした」

それは、ひどいな……。

「だから、私はもつと普通の、ただの女の子を演じようとした。卓球をしないと決めていました。そして何年か過ぎて、卒業しました。私はいじめに耐えきって、みんなとは違う中学校にきました。

今の姫原女子中学校です。ここなら、大丈夫だらうと安心してました。友達も何人かできて私は幸せでした。嘘の自分を作り上げたから、できた友達です。もう、卓球やつてもこんな感じのままだろうと思つていたら……」

「二日目にあつた部活動開始の時か……？」

図星だよな。体がビクツとなつてた。栄は泣きそうな目でうなずいた。

「まだ、ホントの自分が残つていて、嫌でした。闇の自分……またいじめが復活すると思って、怖いんです。ラケットもつたら豹変なんて……さらにおかしなつちゃつて。私……どうしたら……」

「……」

栄も怖がつているんだ。背けているんだ。自分の好きなことから。

## 第9話「石黒栄（覚醒）」

バスは信号で止まっている。栄の話は終わったようだ。栄は俺と同じだ。

「俺も小さい頃から卓球をやってたんだ。でも、いろいろあって……小四くらいで卓球辞めちました」

「そりなんですか……」

「……」

栄は涙を流す。

「それと、お前は自分で壁を作つて恐れている。本当の自分に。逃げちゃダメだ。本当の自分と向き合わなくちゃ。本当の自分で勝負していくんだ！」

「でも……みんなに……嫌われる……」

「まだ折れてる。分かってもらわないといけない！」

「じゃあ聞こうじゃないか。俺と女子卓球部のみんなは栄の本当の性格を見ているだ。でも、今までと同じように接しているだろ？」

「違うか？」

「それは……」

困惑の表情をしている栄。

「遊園地の時はどうだ。みんな栄を引っ張りまわして楽しく遊んでたじゃないか。嫌ってるならほつたらかしにしてるんじゃないかな？」

「みんな……一回しか見てないから……」

「忘れてるつて言つのか？ だが、俺は覚えているわ。本当の栂の卓球を。あまり上手くは無かつたが、楽しそうにやっていた。今の君は卓球になると、今みたいな悩んだ顔をしている。本当の栂は卓球がしたいんだ。恐れることなんか何もない。ただ、君は卓球部のみんなに力を貸せる。俺は確信している」

「……」

栂は黙つたままだ。なら仕方ない。

「……降ります！ ……行くぞ、栂」

「……え？」

バスから降りる。ちゅうど市民体育館を通ったからだ。

「今から卓球をやりつ」

誰も卓球をしていない。平田だからか。とりあえず台を出す。

「……」

栂は黙つてネットの準備をしてくれた。

さつさと準備を終わらせて、俺はシューズを履く。栂もシューズを履いた。

「さあ、ラケットを握るんだ」

「……」

「怖いのか？」

栂は小さくうなづく。まだわかつてくれていない。

「栂！ お前は……卓球をやりたいからあの部活に入つたんだろう？」

「？」

「……」

「……早く卓球やろうぜ。……俺がお前を嫌つてていると思つているのか？」

「……え？」

栂は顔をあげて反応する。

「俺は君が楽しく卓球をやつてるとこを見たい。今なら誰もいな

いだろう。仮にもいじめてくるやつらはない。俺は本当の君を嫌つていな。むしろ大好きだ。僕は、本当の君が大好きだ！」

栄は涙目になり、大粒の涙を流す。

「…………ありがとう、ついでに、まず……えつぐ……」

手でこしこしと涙を拭う栄はなんだかわいらしい。打ち解けた

みたいで良かつた。

「わたし……他人に大好きって……、つい……、いわれたの……はじめでで……」

俺は栄に近づき頭を撫でてやる。

「俺は女子卓球部のコーチだ。偏見なんて気持ちは持たない。みんな大好きさ。支えになる」

「ううう……」

「もつと心に余裕持つてさー、ああ、卓球やろうぜー、はやく栄の本当の卓球を見てみたい」

「は、はい……」

栄は涙で濡れた手でラケットを握る。

「じゃあ……いきますよー！」

「ああ、来い！」

もう口つきが違う。ものすごい集中力を感じさせられる。栄も美雪と一緒に。めちゃくちゃ強くなるはずだ！ そう思える。

きれいなサーブ、ツツツキ、ネットストレスレを越える下回転のピン球。すごい。この前とは全く違う。なんだろうこのわくわくされる感情は。シングルスで大会に出でているような感覚！ ずっとしてみたいような勝負！ 華麗なレシーブ。きれいにピン球をこするように放つ強力なドライブ。かっこいいと思える。美雪と実践練習で、一セット先取でもいいから試合をさせてみたい！

「栄……君はすごいや！ 君が本当の自分に目覚めたから見れた君の実力だ！ すげえ興奮するよー！」

「あ、ありがとうございますー！」

「コーチやられてよかつたってすごく思える。なんだよーこの卓球部。

可能性を秘めた子たちばかりじゃないか！　この卓球部の女子中学  
生はすげえ！　もしかしたら、夏季だけじゃなく、地区、県、全国  
までいけるんじゃないのか！？

これはすぐ期待ができる！　わくわくが止まらないぜ！　残り  
一ヶ月。卓球部の成長が楽しみだ！

翌日。

「昨日はすみませんでした！　今日から頑張りますのでこれからも  
よろしくお願ひします！」

ペニćiと頭を下げて丁寧に栄が挨拶した。

「おかえり！　栄ちゃん！」

部長の美雪は温かく迎える。

「しおりん帰つてきたあ！　早くやひつよー！」

「やうひやうひー。」

友美と真美もいつも通りだ。

「栄ちゃん、一緒にやろうつー！」

「うん！」

一番仲がいいと思われる夏奈子も栄の手を引いて卓球台へ向かう。

「まあ、サイマーな人がいなければもつといこに部活になりそつだけ  
どね」

なんか機嫌が悪いのだろうか、葵。絶対俺のことを見つてるよな。

これで、女子卓球部は本当に揃つた。もうすぐ六月になる。そろ  
そろ本格的に指導していかないとな。この部活なら、やつてこける  
な。

## 第10話「謎の手紙」

ついに六月に入った。もう一週間したらホーム一ヶ月になるな。早いなあ。最近はみんな部活に出てくれて、しっかりと練習してくれる。俺はすごく嬉しい。

「あー、悠斗さん！」

体育館の扉を開こうとしたら、美雪がやつてきた。今来たのか。「今日もよろしくお願ひします！」

ペニリと頭を下げる。

「あー、ああ。なんだよー、急に……」

なんだか照れくさい。

「嬉しいんです！ 悠斗さんとみんなで卓球をやるのが

「ははっ！ そうか。俺もわー！」

二人で笑いあつていたら、いきなり体育館の扉が開いた。赤い髪の子とツインテールの子がいる。栞と葵だ。

「なにしてんのよ。はやくやりますよ」

「ああ、そうだな」

待たせたからちょっと不機嫌なんだな、葵は。いつものことだけど。

「あの……悠斗さん」

栞が話しかけてきた。

「なんだい？」

「えつと……なんでも、ないです」

「え？」

栞もなんか不機嫌そうだ。すぐに中方へ行ってしまった。俺、怒らせてたつけ？

「ああ、今日も五周から始めるぞー！」

「はーい！」

友美が元気よく走り出す。みんなも続いて走る。今日もみんな元気だ。一番早いのはやつぱり美雪か。さすが先輩だな。いや、部長と言つた方が部活らしく聞こえるかな。夏奈子が少しへースが遅くなつてゐる。ここは陸上部じゃないから、速さとかはいいんだけど。これは達成感と体力つけるための運動だ。最後まで走りぬいて、集中力などを少しづつ身につけてもらひ。

そういうや、男子卓球部は外周十周ばかりで、いつもへとへとだつたな……。俺体力ないからめっちゃつかれてたな。中学生の頃が懐かしい。まだ高校二年の男子だけど、やう思ひ、圭一郎も頑張つてやつてたな。あと、

「さん！ 悠斗さん！」

「……つあ！ ごめん！」

「何ボーツとしてんのよ」

葵に冷たく突っ込まれた。

「ごめん。色々考えてて」

「悩み事なら、いつでも相談してください！」

「え？ ……ああ、ありがと、葵」

「い、いえ……」

中学一年生に心配されてしまつた。何考えていたかは黙つておこう。

「五周走つたか？」

俺が聞くとみんな元気よくうなずいた。

「コーチ、ずっとボーツとしてるから、みんな待つてたんだよ？」

真美がそう指摘してきた。

「そ、そうなのか……。すまん、じゃあ次はラリーをやってくれる

か

「はいー。」

六人そろつてゐるから、最近は卓球台を三台も出して練習している。

毎日メンバーを変えさせて練習する。そうした方が練習になる。

今日は、美雪と真美のペア、夏奈子と葵のペア、栄と友美のペアですることにした。

いつも通りのメニュー フォアとバックの素振りと、フットワークしながらの素振り。その後にフォアのラリー、バックのラリーをやる。その後休憩を入れて、次はツツツキのフォアとバックの練習。その後はレシーブ練習などを入れてある。疲れるだろうけど、最低限のことは練習しないと、一ヶ月ちょっとにせまつて夏季大会にでる選手たちに対抗できないかも知れない。できるかぎり練習しないとな。

「さあ、休憩だ！」

「わーい休憩だあ！」

いつも通り双子さんは喜んで水筒がある方に向かって走る。元気はあるならよろしい。さて、俺も立ちっぱなしだし、座つて休憩するか。……ん？ カバンに紙が乗つてゐる。いつの間にだろう。誰かのいたずらか？ 暑いからつて、体育館のドアを開けてたし、こつそり誰か入つてこんな紙を残したのだろう。折つてあるから俺は広げて見た……！

「な、なんだよ……これ……」

いたずらにしてはちょっとな……。殴り書きで『早くこの女子卓球部をやめなければ怪我をすることになるぞ』と書いてある。怪我？ そんなバカな。俺はそんなんにつられたりしないぞ。

「何ですか、それは……」

美雪！？ わ！ おい、紙を勝手に取るなよ……。

「えつと……ええつ！ これは……きょ、脅迫状！？」

「おい！ 声がでかいって……」

みんな寄ってきたじゃないか。

「こんなのがいたずらに決まつてゐるじゃなし」

葵が冷静に言つた。ああ、これは完璧ないたずらだ。

「P.S.って書いてありますよ……？」読みづらいんですけど

夏奈子が文の下の方を見て言つた。書いてあつたつけ？よく見てなかつた。殴り書きだしな……気付かなくてもおかしくないよな。「なになに……『雨の日、ずっと待つてゐるぞ』？」どうこうことでしょう？

「雨の……日？何が引つかかる……。俺は何か……忘れてる？

「……ぐつ」

頭痛だ。なぜか急に頭が……。

「大丈夫ですか！？」

葵が近寄つてくる。みんなも心配そうに俺の周りに集まる。……

治まつてきた。

「……大丈夫だ。部活、続きをやりついぜ」

「でも……」

不安そうな顔をする美雪。

「大丈夫大丈夫。ちょっと頭痛くなつただけだつて。さあ準備しろ

ー！」

「は、はい」

みんな乗り気じゃなくなつちゃつたな。悪いな……。俺、どうしたんだろうか。何か忘れることがあつたか？

まあいいか。みんなはツツツキ練習に入つてる。調子悪いなら、倒れるわけにはいかないな。この子たちに、一勝でもいいから、夏季大会を勝たせてあげないと……。

## 第1-1話「休部処分」

俺の高校の卓球部が休部処分を受けてしまった。原因は先輩が他校と喧嘩してしまい、大会の出場停止及び部活停止処分という「残念なことになってしまった。2学期までは部活動はやれないらしい。非常に悔しい。

「残念だつたなあ」

圭一郎が嘆く。

「ホントに残念だよ。大会は楽しみだったのに……」

「そうだな。なんで喧嘩とか乱暴なことしたんだろ? うなあ

「さあな……」

俺は靴を履いて門に向かう。

「それじゃあまたなー圭一郎」

「おーおー……」

「なんだ?」

圭一郎に呼び止められた。早く姫原女子中学の部活動へ向かわないといけないってのに。

「お前つていつもどこ行こうとしてんなんだ?」

「え! ? エット……」

「言えない。女子たちに 中学生に卓球を教える」となんか。  
どういふまかそつか……。

「ちよーちよーと自主トレ……かな」

「かなつて、お前なあ」

圭一郎は呆れたように俺に言つてきた。まあ、俺だつてそつとつだらうけど。圭一郎の立場から見たらな。

「そ、そういうわけでじやあなー」

「おーおー……」

「なんなどいひでずつと捕まつてたら埒があかない。走つて門まで行く　が、門のところで何者かに腕を掴まれ、動きを止められた。

「誰だ！？」……つて、梨香か

梨香が俺の腕に抱きついてきてる。なんだよ、急いでるとか！」

「いつもどこに行くのよ？」「めっちゃ怪しまれてる。

「ど、どこだつていいだろ！　それじゃあなー！」

行こうとしたら、次は足をひっかけられた。不覚にもこけた。

「痛つてーな！」

「いいなさい！　どこに行くのよー！」

なんか相当怒つてる。どうするか……。

「……おーおい！　あれを見ろよー！」

「ふえ？」

指差した方向を梨香は見た。今だ！

「あ！　しまつた！」

高校生で引っかかるやつもいるんだな。引っかけられてこけた俺が言えることじやないけどや。

「休部しちゃつたんですかー？」

「ああ」

部活終了後、たまたま美雪と一緒に帰つてゐる俺は休部処分を受けたことを話した。

「部活……停止ですか……」

美雪はうつむく。この女子卓球部は休部程度じやすまないもんな。廃部。阻止するために俺たちは頑張つてる。

「廃部はさせないぞ！」

「え？」

見透かされたのかとこつよくな顔をした美雪は唖然としている。

「大丈夫さ。みんな強くなつてきているから。」このペースでいけば廃部になつたりしないから。プレッシャーを感じなくていい！」

そう言つたら美雪は少し微笑んでくれた。

「ありがとうございます。私は頑張りたいです」「ああ、応援してる」

「は、はい」

美雪が顔を赤くしている。照れてるところ初めて見た気がする。

「あ、あの……」

「ん？」

「手、つ、繋いでもいいですか？　途中まで…」

「いいけど、どうして？」

「え、えっと……元気をもらつためです！」

「そつか。じゃあ、はい」

俺は美雪の左手を握つてあげた。柔らかい感覚がある。

「ありがとうございます……」

「お、おひ」

なんか、照れくさくなつてきた。美雪もうつむいて顔を合わせようとしてしないし。……まあいつか。

夕日が地平線へと隠れていく。俺と美雪はその地平線へと向かい歩いてゆく。

休部しちゃつたけど、美雪たちの部活は行くことができる。六人みんな強くなれる。絶対に。夏季大会は絶対に負けられない。

## 第1-2話「ランニング！」

土曜日。なんにもする事がないから走るとするか。ランニング用のシューズを履いて俺は外に出る。いい天気だ。でもまだ少し暗いな。当たり前だ。今は早朝の六時だ。六月だが少し肌寒い。

今日は家からスタートして、少し離れた公園まで行つて、そこから往復して来るか。だいだい二十kmくらいは走れていると思う。七時過ぎに帰つて来ることは……難しいな。まあコンビニでなんか買うか。最近買ったTシャツを着て準備運動をして……。十分にやれたな、じゃあ行くか。

結構走った気がするが……そろそろ七kmは走れたくらいだろうか。けつこう疲れるな……。ちょっと休憩するか。そこにあるベンチに腰をかけよ。……あれ？ そのベンチに見覚えがある子が。真美だ！ ここに住んでるのかな？ ていうか、汗だくじゃないか！

「真美！」

「ん？ あれ！ フーチ！」

真美は驚いたような顔をしている。俺も驚いてるけどな。「どうしてここに？ その格好は、ランニングでもしてたのか？」  
「そだよー。体力を上げるために最近土曜日に走つてるようにしてるんだ！」

「そうなのか」「

感心するなあ。偉い。あれ？ そういうや、友美の姿がないな……。  
「友美は一緒に走つていなかの？」

「友美？ あー、まだ寝てるよー」

友美らしいな。友美ってマイペースみたいな感じだしな。真美もだけど。もうすぐ七時だから起きてくるくらいか？ 私生活は知ら

ないけど。じゃあ一人つてわけか。それなら……。

「一緒に走るか？」

「え？ いいの？」

「ああ、さあ行こうぜ！」

「うん！」

まだ元気っぽいな。真美の体は汗で濡れているようだ。真美の黄色の服は汗でかなり染みているのが分かる。首にかけているピンクのタオルで真美は自分の顔と首周りを拭う。それと、服の中にまでタオルを入れて汗を拭っている。……って俺が目の前にいるってのに！……まじまじ見ていたら……いけないよな。いきなりすぎで目線がそこにいつて……。

「……別に」「一チに見られてても良かつたけどね」

「え、ええっ！」

見てしまったのがバレてる。いや、俺の目線を見たらそりや分かるか。嫌な風に見られてしまったかな……。

「じょーだんだよ！ 本気にした？」

「い、いや、ちょっと驚いただけさ」

ウソです。ちょっと信じました。

「さあ、走ろう！」

真美はいきなりダッシュを始めた。

「ま、待てよ！」

真美のやつ。結構速いな。一緒に走るのは初めてだ。いつも体育馆で走っている所を見てて、速い方とは知つてたけど、なかなかに速い……。負けてられないな。

「すごいな、真美！」

「へへっ！ 小学校の時は、マラソン大会は学年で一位だったんだ！」

「マジかよ！ そういうやつ、友美がこの前言つてたな。真美は色々とできるとか。そりやそういう結果出されたら、気にしちゃうよな。双子なのに実力の差が違つてことが。

「さあ、置いて きやつ！」

真美から女の子らしい声が聞こえたかと思つたら、やつをままで見ていた真美の姿が視界の下の方へいく。ばたつと真美は倒れた。つまずいてこえちましたのか。

「大丈夫か！？」

「痛つたーい！」

真美はしゃがみこんで足を押えてる。怪我をしたのか。涙目になつてゐる。右膝を怪我してゐるようだ。血が出ている。あれ、右腕もすりむいてるじゃないか。

「とりあえず……傷口を水で洗おひ」

「う、うん」

かわいいな。涙目でうなづく女の子は……。つて何思つてんだ俺は！ そんなことじやない！ お、ちょいびといところに公園が。この前葵と逃げてきたところじやないか、じいじい。じいじい辺まで走つて来たのか、俺。

とりあえず公園に入り、水道で真美の膝と腕についた土を洗い流す。

「痛ーい……」

「我慢我慢」

よし、泥は落とせた。次は消毒してやるか。怪我をした時用に俺はランニング中には消毒用の薬を持つてきている。そんな機会はいまだになかったけどな。

真美をベンチに座らせて、膝を出してもいい。消毒液を傷口に付ける。

「うう……」

「ちょっと染みるだろ？ けど、我慢な」

「うん」

付けてあげた後、たれてきた部分をハンカチで拭いてやる。次は腕に付けて同じようなことをする。その後、包帯を巻いてやつた。

「ありがとう」

「気にするなつて！ 今日は家に帰つた方がいいぞ。無理はいけないからな」

「分かつた！ コーチが用意周到で助かつたよー！」

「はは、このウェストバッグは色々入るからな。結構気に入つてるんだ」

俺は自分の緑色のウェストバッグをポンとたたく。

「あはは！ コーチつておもしろいね！」

「え？ そ、そうかな」

朝日に照らされた真美の笑顔はとても美しく見えた。なんかドキドキしてしまつた。

「……おぶつてこつか？ 歩き辛いだろ？」

「でもー、真美は重いよ？」

「いいよいよ、気にすんなつて！ 俺は結構力あるからさー。」

「おー！ 頼もしー！」

真美が胸の前で手を組む。俺はしゃがんで真美に乗るよつこと促した。おぶつてみたけれど、軽いじゃないか。このまま真美に案内してもらひながら家に向かおう。

こうして家の前まで真美を送つて行つた。……いつの間にか八時過ぎてしまつている。腹減つたなあ……。

## 第1-3話「純粋」

今日は雨だ。梅雨の時期だからなあ。でも卓球は体育館でするからな、六月は。晴れてくると次は外までじめじめした感じの暑さになるから、それは嫌だな。他の事からみたら些事程度じゃないな。「体育館あつーい……雨降ってるのに」「あつーい……」「弱音を吐いてるのはもちろん真美と友美だ。この一人がこんなこと言つのはなんか慣れてきたな。

「暑い……」

あれ、夏奈子も言つてるよ。とかあ思いながらも俺もここに来たら暑いなとは思わなかつた訳じゃない。でもそれを乗り越えて練習すれば成長をするんだ、みんな！……といつ余計なことも言える元気がない。でもこの子たちのために弱つてた姿を見せるわけにはいかない。

「上手くツッツけないじゃない」

「うーん……ちょっと横に動かし過ぎだよ。ボールの下の方をこするように斜め下にラケットをおろすんだ」

「わ、わかってるわよ」

葵は俺の話を聞いてツッツキの練習をする。ツッツキはピン球の回転を下回転に変える方法だ。これが上手くできないと大会では不利になるだろう。誰でも下回転のサービスを使つてきたりする。たまに横回転をかけるやつもいるが、そうはいらないだろう。それにたつた一ヶ月程度でそんな細かく教えてたら大変だ。やっぱり基本を徹底しないとまず勝てないだろ？しつかりと基本の練習をさせて、その後に実践練習をさせる。大会のルールがすぐにわかるように体

で身につけてもらわないとな。サービスの仕方とかな……。

「うーん。むずかしー！」

「むずいー！」

真美と友美はダブルスの練習もしてもらっている。二人は双子だからと勝手で単純な考えだが、意気が合ひそうな二人ならやれると信じてる。

「みんなお疲れ！ 十分間休憩しようか」

みんな疲れ顔だし、休ませてあげないとな。それに暑いし。長時間やらせっぱなしは体に悪い。

「せんぱーい！ 友美のラケット見てーー！」

「ん？」

友美が近寄ってきて、自分のシェークハンドラケットを見せてきた。

「ラバーを買つたってことか？」

「そだよ！ ラバーは色々種類があつて迷つたんだよねえ。粒々があるラバーとかそれがないラバーとか。よく見るとなんかラバーによつてスマッシュが強くなつたり、回転がすごくなつたりとか、回転の効果を受けないと書いてあつてさー。それみて選んできただ！」

ほう、自分で選んだのか。自分の金で買つたのかな？ ラバーフテ結構高いのにな。しかもショーケンハンドは表裏にラバーを貼るからその分高いし。

「これは……裏ソフトってことは回転をかけやすくするやつか。確かこのラバーは、回転かかりやすくてドライブとかも打ちやすいから、初心者にもお勧めのラバーだな」

「へー！ よくわかつたね！ そだよー。そうやって書いてあつた！」

俺の方が背が高いために上目使いで見ていた友美は無邪気に喜んでいる。そして友美は踵を返して、

「それじゃあ休憩しまーす！」

と言つて、自分のカバンがある方へかけていく。

「栄ちゃんには関係ないでしょ」

「……」

あれ？ 喧嘩？

「……なら勝負してください。私が勝つたら、あきらめてください」

「……分かったわ。私が勝つたらもう文句なんて言つてこないでね」「分かりました」

喧嘩しているのは、栄と、美雪だった。一体何があつたんだ？ こっちにくるんですけど。なんか真剣な表情してる。美雪はこっちをちらつと見た。ちょっとぴり顔が赤く見えたよくな……。なんか話しがけづらい。

美雪と栄が卓球台の前へ行く。このピリピリした感じはなんなんだろうか。怖いんですけど。

四人が俺の横に来た。

「お、おいこれは一体何なんだ？」

「さあ……」

葵はすぐ不機嫌そうだ。なんだ？ みんなで喧嘩でもしたのか？ いや、葵はいつもこんな感じか。

「恋の戦いです……」

夏奈子が静かにそつぶやいた。恋の戦いって……。まさか美雪と栄は好きな男子が一緒で、栄がなんか言つて美雪が怒ったのか！？ と、止めづらい。ここは見守つているほうが正しいのだろうか。

……悩む。

「先に一セツト取つた方が勝ちだからね。栄ちゃんはもう知つてると思うけど、一セツトは十一点を先に取つた方が獲得できるわ。サービスは二回づつ。互いに十点取つたらデュースになつて、先に二点差つけたほうが一セツトを取れるわ。いいわね？」

「はい！」

元気よく返事をした栞は構える。  
最初のサービスは、栞からだ。

## 第14話「美雪 vs 桑」

やつぱり、美雪の方が強い。桑はミスしてばかりだ。美雪の下回転サーブに桑は上手く返せずネットの当たたり、変な方向へ飛んでいつたりする。ラリーも続かない。桑の打ったピン球がチャンスボールと分かると、美雪はすぐにスマッシュショやドライブを放つて確実に点を入れていく。

桑のあの悔しそうな顔。負けたくないと思っているのだろう。少し焦っているように見える。ツツツキサーブもネットにかかり、ミスをして美雪に点を取えてしまつ。この調子だと美雪が勝つちまうな。

この試合は一セット先取。先に一回勝つた方が勝ちだ。今はどちらも一セットも取っていないが、点数的に言つと今一セットを取れるとしたら美雪だ。美雪がハ、桑が二・六点差もつけられている。桑は確かに強いが、この逆転できるほどの実力を持つているのかはまた微妙なところだ。美雪がサーブミスやスマッシュをミスれば勝ちへと通じる道ができるいくかもしれない。

「……負けたくない」

そうやって小さな声で桑がつぶやいたような気がする。さあ、先輩が相手なんだぞ？　桑はどうする。今から美雪がサーブだぞ。サーブ権は一回ずつだ。お前がミスつたらもう後がなくなるぞ。それか桑がツツツキで美雪の下回転を返して点を稼ぐ。それが美雪がサーブミスをすると運だめしでいくかだ。

美雪がピン球を上へ上げる。そしてピン球が落ちてくるところできれいにピン球の下をこする。ピン球は下回転をしながらバウンドをして、コート中央にある青いネットすれすれを越えて、桑の方のセンター・ラインより左の方にボールが着く。

「……！」

桑はすぐに自分のショーケーン・ハンドラケットのバック側でツツツキ

をした。今度は上手くいくか！？ 芥が放ったボールはネットをかすめて美雪のコートにギリギリに入る。

「うわっ！」

美雪は思わず声を出した。美雪は打とつとしたが間に合わず。ネットをかすめて、その付近にピン球が落ちたら確かに取ることは難しい。

「やつた！」

芥も小声で思わず言つてしまつたのかな。でも嬉しい、一点だろ？。今までの一・点は美雪がスマッシュをミスして入つた一・点だ。

「……取り返す」

美雪はピン球を取つて、サーブの構えをする。ピン球を高く上げて、それからのツツッキを放つた。ネットを越える。だがピン球はコートに入らず、エッジ 台のふちの方も越えて、床に落ちた。

美雪はミスをした。

芥は一点も獲得することができた。喜びに満ち溢れた笑顔。最高だ。だけど、喜んでいる場合じやないぞ、芥。お前は今四点差もつけられている。

この後、美雪はミスしたり芥に点を取られて、デコースにしてしまつた。同点の十点になつて、勝敗はどちらか……わからないな。だけどこの流れでいくと……。

芥はサーブをする。普通の上回転のサーブだ。しかし、スピードが速く取りづらそうだ。やはり。美雪は空振りをしてしまう。そして。

いい勝負だつたと思う。芥は最初のセットは取ることはできたが、次のセットは美雪に取られてしまつた。芥は涙目だつた。でもまだあと一セツトあるぞ。最後のセットは、美雪が十点、芥が八点とけつこういいところまでいった。

芥がサーブ権だ。芥は下回転のサーブを打つ。美雪はそれをカツ

トする。そこでチャンスが生まれた。美雪がカットしたピン球は高く上がった。チャンスボール！ 桜は奇麗な曲線を描いてピン球を打った。強力なドライブが美雪のコートのセンター・ラインに来た。だが美雪はそれをドライブで返して。

結果は美雪の勝ちだ。ホントにいい勝負だった。

桜は泣いて外に飛び出してしまった。夏奈子が追いかけて行つてくれた。俺も行こうとしたが止められた。「うーん……。恋つてよくわからないものだな。卓球で勝敗を決めるものなのだろうか。

「あの……」

美雪が俺に話しかけてきた。

「勝手なことをして、部活を乱してしまって」「めんなさい！」

美雪は深々と頭を下げて俺に謝罪してきた。なんかこっちも悪いなって気持ちになつてきた。

「別にいいよ。一応あれも実践練習になつただろう」

「ホントに」「ごめんなさい」「すごく反省してるみたいだな。俺は事情とかよくわからないから謝られても困るだけなんだけど。

とりあえず部活は終了した。桜も謝りにきて、また困った空氣になつてしまつた。

恋かあ……。

一人は誰に恋をしたのだろうか。泣くほどに、対決したいほどに愛してしまつた人が。この学校で好きになつた人でもできたのか……！

「お、おい桜……」

俺はつい尋ねてしまつた。動搖してしまつて……。

「はい……？」

「まあ、恋愛は自由だらうけど、女子と女子で……いや、女子校の中ではあまりそういうこと話したりとかは……その……」

「え・ええええっ！」

相当驚かれた。そりや知られたら驚くよな。

「わ・私は女の子好きじゃありませんっ！ ちゃんと男の人が好きですよ！」

手を横に振つて栂は俺が思つていたことを顔を真つ赤にして否定した。

「そ・そうか。……悪かった」

違うのか。女子校には男子いないからてつきり……。

「えつと……。卓球で負けたくらいで恋をあきらめちゃいけないぜ」

「え？」

「負けたって、恋に負けたわけじゃないだろ。だから、あきらめるなよ」

「清水さん……」

し・栂が泣きそうだ。俺・おかしいこと言つたかな？

「清水さん……この前、美雪先輩と……」

「美雪と？」

俺と美雪が何かしたつけ？

「……手・繋いでましたよね……」

「俺と美雪が？」

「そうだったつけ……。あ！ そういうやこの前……。栂は見てたのか。

「あれは……気にしないでいいさ……ん？ でもなんでそんな話題に？」

「い・いえ……」

栂は首を横に振つた。その後俺の方をじつと見つめる。

「清水さんは、好きな人はいるんですか？」

「え？」

突然の質問に、俺は啞然とした。俺の……好きな人？

「いなideど？」

「そうですか……」

硬かつた栢の表情が緩んだ。俺のを聞いてどうするんだ？

「よし、もう下校時刻だぞ！」

「あ、はい！ それじゃあわよなりー、悠斗さんー。」

「ああ、

栢に初めて名前で呼ばれた。今の会話で少し打ち解けることができただろうか。……俺も帰るか。なんか疲れた。

## 第15話「咲花梨香（疑心）」

今日の授業が終わった。部活は休部中だし、帰るしかないんだよなあ。まあ、美雪たちに早く卓球を教えられるし、別にいいか。俺は靴をげた箱から取り出して履く。ちよつと靴紐がほどけそつだけど、家でやればいいか。

「悠斗ー！」

俺が門に向かつていると梨香が後ろから手を振りながら俺に近寄つてくる。

「どうした？」

「今からその……」

いきなりもじもじし始めた。今近寄つて来た元気は一瞬にしてどこかへ消え去つた。

「なんだよ？」

「今からいつもの体育館で、卓球しない？」

突然の誘い。

「なんで？」

「ひ、暇だからに決まってるでしょ！　期末考査終わつたし！」

すゞい怖い顔で睨んできた。確かに、俺も暇だな。

「あ、ああ。いいよ」

「それじゃあ行きましょー！」

ころころ変わるなあ、梨香は。梨香が門付近へ行くと何かに気づいたようだ。

「あれって姫原の制服……？」

姫原？　こつから離れてるの？　びつじて……。まさか……。

「あ！　先輩いたよー！」

「ホントだー！」

な、なんで6人全員がここに……！

「ちょつ、ちょつとー、どうしてここ？」

「来ちゃ悪いわけ？」

葵は変わらず不機嫌ですね。……じゃなくて！

「悠斗？」

後ろから不思議そうな顔をした梨香が話しかけてきた。これはとてもまずい状況じゃないか？

「あの、勝手に来ちゃってすみません」

美雪が丁寧に謝る。

「い、いいけどさ……えっと」

「……」

梨香はたた唾然としてる。ホントにこれは予想をしていなかつた事態だ。とりあえず、

「ご、ごめん梨香！ 僕、用事で来たから行くわ！」

「えー？ ちょっと！」

とりあえず逃げよ！

あ！ ちょうどいいタイミングでバスが停車してる。

「み、みんなとりあえずあのバスに！」

「え？ あ、はい！」

卓球部メンバーもあわてている。俺もだ。運悪く梨香に見られてしまつた。もし女子校の卓球部で教えることがばれたら……。圭一郎にも知られてしまうだろ！

美雪たちをバスに乗せた。俺も勢いで乗ることになつた。行先は今はどうでもいい！ たまたまこのバスには乗客がないようだつた。俺は安堵の息を漏らす。

「いきなりどうしたんですか？」

夏奈子が怪訝そうに聞いてきた。それはこっちが言いたい言葉だなんだが。

「お前らもどうしてここに？」

「なんであつて、先輩が練習に来なかつたからだよ」

友美が困ったような顔でそう言つた。

「練習今から行くつもりだつたんだけど……」

「もう終わつたわよ！」

そっぽを向きながら葵は怒りを込めたような感じで言つた。

「え！？ でもまだ……」

「今日は期末テストで早く終わつたんですよ」

そつか。中学校はもうそんな時期か……。もう六月下旬だしな。  
「だから部活動時間が早くて、終わりも早くてまともに練習をして  
いないわけか……。ごめんな。高校は期末のテストはもう先週の内  
に終わつて、今日はもう通常授業だから長引くっちゃつてさ」「  
「気にしなくても大丈夫ですよ！」

葵は明るい声で笑顔をみせる。とても輝かしい笑顔だ。

「ホント悪かった」

今日はどうしようか。練習を無しにしちゃつか？ でも、大事な  
夏季大会が迫つて来ているしな。

「今から練習したいか？」

「今からですか？」

「ああ」

俺はうなづいて見せ、近くに練習できる市の体育館があると説明  
した。  
みんなは了承してくれた。

バスの中で色々話が聞けた。あらかじめ俺にテストについてのこ  
とは話してたらしい。悪い、忘れてた。ついいつもどおりに行動し  
ていた。あと、俺も伝えておけばよかった。

それで俺が全く来ないから、バスで頑張つて俺のいる高校へと來  
たみたいだ。ホント悪かったよ。無駄足させてさ……。お詫びに今  
日は違うところだけ練習をいっぱいさせてあげることにした。

「六台しかないねー、卓球台」

壁側によせてある卓球台をみて真美はそうつぶやいた。出しつぱなしは邪魔だからな。壁側にあれば邪魔にならないし、台がいつぱいあつてもこの部屋には入りきらないだろう。

「三台あれば大丈夫だろ。さあ、準備して！」

「はーい！」

六人は台を準備するために動き出した。そついや、彼女たちは制服だ。……出てた方がいいよな、俺。

「ネット準備しよ！」

「うん！」

栄と夏奈子が折りたたまれていた卓球台を広げ、床に置いてあつたネットが入つているボロボロの箱を開ける。葵たちも楽しそうに準備をする。

最初の時、こんな風に楽しくやつていけるとは思わなかつたな。みんな俺を見て嫌がつてたりして、部活に来てる人も一氣に減つたな……。

栄、葵、真美、友美、夏奈子。そして、俺をコーチとして選んでくれた、美雪。美雪のおかげでこんな出会いができたんだ。感謝しないとな。こういう思い出はもう一度となさそうだから。一日一日大事に過ごしていかないとな。女子卓球部を存続させるためにも。コーチになつたからには……。

…………ん？ 待てよ。今まで疑問に思わなかつたけど……。いまさら過ぎるけど、どうして美雪は俺をこの女子卓球部のコーチにしたんだ？ しかも出会つてからすぐに。ただ俺はあの時、男子たちに絡まっていた美雪を助けただけだ。初対面の人に対する心遣いがする。初対面の人をれといきなり頼むなんてちょっとおかしい気がする。初対面の人を誘つて卓球した俺もおかしいけど。学校側はどうして俺の出入りをオーケーしてくれているんだ？ ……なんで今になつてこんなことを思つたんだろう。

「……さん。……斗さん」

「どうしてだらうか……？」

「……悠斗さん！」

「え？ わわあ！」

気づいたら美雪が俺の傍まで迫っていた。びっくりした。

「悪い。なんでもない。まあ練習だ！」

「……悠斗」

え？ 後ろから聞き覚えのある声で呼ばれる。振り向くとそこには。

「梨……香……」

梨香と一緒に連れてきたのか判らないけど、圭一郎も一緒にいた。追いかけてきたのか？

「説明してよ。……どういう事？」

この状況は、終わったな。

## 第1-6話「咲花梨香（絆）」

「黙つてないで……話しなさい」「とても悔しそうな顔をして静かに言ひ。色々な感情を抑え込もうとしているのだろうか。

「悠斗。もうここは話さないとダメなところじゃね？」

圭一郎がやれやれといいたげな顔をして苦笑している。

「……判つた。話すよ」

俺は一人に五月くらいから姫原女子の中等部の卓球部にコーチとして指南していること、卓球部のことを話した。

「……その、美雪ちゃんって言ひの？ 美雪ちゃんはどうして悠斗を誘つたの？」

梨香が美雪に視線を送る。

「え……？」

「変なグループから悠斗が助けてくれたのは判つたわよ。その後卓球をして実力が判つたのも。でもどうして男子の悠斗をコーチにしたわけ？ この体育館には女子の人も来る時があるわ。……何か裏もあるのかしら？」

梨香が疑いの目を向けて冷たく言い放つ。美雪はうろたえてしまつていて、俺もそこは疑問だつたけど……でも、

「梨香！ そこまで責めなくともいいだろ！ どんな理由があつたって、俺はこの子たちに卓球を教えていくつもりだ！ 部活動を失くしたりさせない」

「でも……悠斗は無理をしてるんじゃないの？ 姫原は高校から遠いのよ？ そこから部活動時間に間に合ひづつに急いでいくなんて……。中学生の子ぐらこではもつ『迷惑』って言葉が判るはずでしょー！」

「……」

美雪……。俺は……。

「俺は迷惑なんて思っちゃいない。俺は毎日全力でこの子たちに卓球を教えていた！」

「本気で言つてるの？」

「当たり前だ！」

「それなら……」

梨香が俺たちを横切り卓球台の方へと歩く。

「悠斗がそこまで言つのならあなたたちは強いのよね？」「

「何よさつきから偉そうに。悠斗さんと美雪先輩を責めて……葵が小さな声でそうつぶやいた。

「悠斗コーチは……本当に一生懸命教えてくれたのに」

夏奈子が悲しげな声で言つ。

「先輩は……友美たちを元気づけてくれたんだよ！」

友美が主張する。

「真美が怪我した時にも優しくしてくれたんだよ……」  
続いて真美も、

「悠斗さんをやめさせようとしているんですね？……私は、悠斗さんと過ごせて良かったと思ってる。美雪先輩とも……。おかしいと思われたつて、悠斗さんは女子卓球部の『一チなの！』二人を責めるなんて、私が許さない」

「……」

「みんな……」

美雪が涙目になりながらみんなのほうを見てくる。

「だとよ、梨香」

圭一郎が割り込んで会話に入つて来た。

「これだけ想わてるんだ。悠斗は本気でこの卓球部の子たちに熱心に教えてたんだ。そんな向きになることないんじゃねえか？」

「……」

梨香が振り絞るような声で言つた。

「……だめ。だめだめだめだめ！ 女子の中に、なんで悠斗をいれなきやなんないのよ！」

足で思いつきり床を踏みしめている。

「悠斗は渡さないわよ……。卓球で勝負をつけましょ」

「卓球……？」

「そうよ。……三セット先取のミックスダブルスでやりましょ。私と圭一郎が相手になるわ」

「え！ オレもかよ！」

圭一郎が驚く。

「私たちに勝てたら、悠斗はあなたたちのものよ。もし私たちが勝つたら、悠斗は……私のものなんだから！」

「ちょっとそれは表現的に……」

「う、うるさいわね！」

圭一郎の突っ込みになぜか梨香が怒った。……でもこれは、梨香を認めさせるチャンスだな。なかなかおもしろいこと考えるじやないか。

「よつし！ ダブルスなら友美たちがやるよー」

あれ？ 友美と真美がなんかやる気満々になつてゐる。

「まで二人とも！？」

「大丈夫だよ！ 真美たちにまかせて！」

「そ、そういうことじゃなくて……。ミックスダブルスは男女混合ダブルスのことで、男と組まなければならないんだぞ」

「え、そなの？」

中学の大会じゃ普通は男子と女子とわかれてやるからと思つて話してなかつたな。

「ということは……悠斗さんと組む人を選ぶんですね」

夏奈子はすぐ理解してくれた。

「そういうことだ。……美雪。ダブルスはできるか？」

「そこまで上手くはないですけど、大丈夫だと思います。悠斗さんがいるから」

「そつか！ それじゃあ頑張ろつな」

「はい！」

みんなは俺のことを想ってくれてる。勝たないとみんなの気持ちを裏切つてしまつ。負けたらどれほど辛いものか……。いや、負けることなんかない。美雪とダブルスを組んだことないけど、やるしかないんだ。

「美雪」

「はい？」

準備を始めた美雪は首をかしげた。

「信じてるから。美雪のこと」

「は、はい！ 私も信じてます！」

さあ、女子卓球部の運命がかかってるんだ。勝負だ、梨香。圭一郎。

## 第17話「咲花梨香（対決）」

サーブ権はこっちにある。シングルスとは違いダブルスは右側の方からサーブをして、相手のコートの右側へといれないといけないというルールがあるから面倒だ。相手は高校生二人組だ。一回のミスで命取りになる可能性もけつこつある。だから、失敗はしないようしたい。

俺がツツツキのサーブを出す。普通の下回転。レシーブ役は梨香だ。梨香はカットするが、ミスしてネットにかけた。こっちの得点だ！

「……まだ始まつたばかりよ」

俺はもう一度下回転を出すことにしてみた。返された。それはもう当然と思ってなきやいけない。頼む美雪。美雪もツツツキで返した。でも圭一郎はそんなにあまくはない。カットマンだからな。すぐカットして返してきた。……俺としたことが、ミスしてしまった。けど、これだけで負けは決まつたわけじゃない。

一回のサーブを終えたら、その一人は場所をチェンジしないといけない。俺がレシーバーにならず、美雪がレシーバーになる。ダブルスはそうやって進んでいくもの。まあ、知らないことはないだろうけど、美雪と相手一人はな。

着々と試合が進んでいく。流れは、俺らの方が圧勝中だ。かなりのプレッシャーを感じてるのか、梨香は調子が悪いようだ。

「な、なんで……」

相当焦つてんな。この調子なら勝てるけどな……もう一セットも取つたから、余裕だな。さあ、終わらせるぜ。残り4点を取ればもうゲームセットだ。

美雪がサーブをする。圭一郎がすぐに返す。でも俺はもう負けな

い。攻撃プレーをするはずの梨香は不調だ。強気でいく。俺の放ったドライブが相手のコートに入る。梨香は返してきたが、ネットに阻まれてまた失点。

「本気でやつてるのか、梨香……？」

「……ひるさいひるさい」

涙目になりながら静かにそう言つ梨香。相当悔しい気持ちなんだな。でも、手を抜いてられない。俺は美雪たちに安心して部活をやつてもらいたいから。勝つんだ。

「梨香」

「何よ」

突然、圭一郎が真剣な顔で梨香に向き直る。

「まだ終わってないからな」

「判つてるわよ！」

落ち着かせようとしてるのか……。

「判つてるのなら、もつと落ち着いてプレーをしぃ。判つたか？」

「……」

梨香は沈黙した。何も言わずに、ただ俺たちの方を見ている。そして、深呼吸をして、

「……よし」

気合を入れたみたいだな。いつからが本当の戦いになるのか。

「美雪、しつかりやれよ。あいつら強いから。特に梨香の方は注意しろよ。あいつのドライブはめっちゃスピードがあるから」

「判りました……」

美雪はまだ笑顔だ。勝つといふことしかもうないからか。俺だって負けてられないな。

強い。

あつとこう間にデュースにされてしまった。こっちも頑張ったんだけどな……梨香のレシーブがなかなかのもので、失点を許してしまった。

まつた。めんぼくないな。

「どうかしら？ これが私と圭一郎の実力よ」

一気に前向きになつたな……。

「まだ終わつてませんよ、梨香さん」

美雪も燃えている。

「これはどつちが勝つだらうな」

他人事のように言つてるし、圭一郎。

「いきます！」

美雪のサーブ。梨香がループドライブで一気に決めようとする。美雪のサーブは甘かったのか。それでも俺は……。ドライブで返す。だけど、ミスつちまつた。圭一郎にピン球が当たつて、そのまま床に落ちた。

「チャンスね……！」

くそ！

「……悠斗さん」

（）今までやつてきたのに、負けてたまるか！ 俺はカツトした。  
……しまつた！ 浮き過ぎだ。これはアウトか……？

ピン球は、サイドをかすめた。よつし！

「どうする、梨香？」

「つるせこつるせこ！ 勝つてやるわよ！」

こんなとこりでこんな熱い感じの試合ができるなんて思わなかつた。しかもミックスダブルスで。

「もう一一点だ！ 集中！」

「はい！」

俺はこれで最後と思つて、サーブを決める。

「やつたあ！」

みんなが俺の周りに駆け寄る。

勝つたんだ。俺と美雪は、相手に一セットも取らせずに勝利した。

美雪にはなかなか実践練習になつたに違いない。

「さすがだな、悠斗」

圭一郎は落ち込んだ様子もなくいつも通りの平然とした顔で話してきた。

「これで、お前は「一チとしてやつていけるんだ」

「ああ」

無理やりやめさせることはこれで無くなつた。良かつた。美雪も安心したような顔をしている。

「……」

梨香は悔しそうな顔をしているが何も言わない。

「かえろーぜ、梨香。オレは疲れたぜ」

帰る支度をし始める圭一郎。あれ、梨香は全く反応しないけど。先輩はこれで友美たちをずっと教えてくれるんだね！

「うん！」

「まあ、あたしはひとつでも良かつたけどね」

「葵ちゃん照れ隠しー？」

「ちーちがつ……！」

あつちはあつちで盛り上がつてゐる。

「……決めた」

梨香が何かつぶやいて俺の田の前に來た。

「決めた。私もコーキするわ」

「え……！」

いきなりの宣言。懲りていないんだな。

「男子を女子校に一人で行くなんておかしいわ。私もついてくから。よろしく」

「お、お前も女だろ……」

と突つ込み入れても考え方を変えてくれないのはもう判つてゐる。

「梨香つち増えるならみんなもつと強くなれるね！」

「うん！」

真美……。なんか勝手にニックネームつけて迎え入れようとして

るし。夏奈子まで……。

「これが昨日の敵は今日の友って言つんですね！」

栄、だいたいあつてるけどこれこまとめて終わらせないでくれ。圭一郎は参加する気がないかのよつこもつこなし……。

「よ、よろしくお願ひします……」

美雪はなんか苦手意識を持つてゐるぽこな。……俺と同じだ、美

雪。

明日から面倒なことにならうただな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3209w/>

---

卓球少女

2011年10月10日03時12分発行